

教育研究業績書

2018年05月14日

所属：看護学科

資格：教授

氏名：宮嶋 正子

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	褥瘡予防, 急性期看護
学位	最終学歴
博士（看護学）	大阪大学大学院博士後期課程修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 卒業演習・英語文献講読	2018年4月～現在まで	演習ゼミ生6人が同一テーマで行なうのは難しく、体圧・ずれ測定と皮膚水分量・蒸散量測定の二つに絞って行なう。看護英文講読は、卒業研究（演習）に関連した看護・医療に関する文献に慣れ、関連した英語文献を抽出し、その文献を読むことが目的である。英語文献を読むことは、和文献と比べて、研究の目的・意義について思考を深めることが可能となるため、少人数制で実施していく。皮膚を守るケア（褥瘡発生予防実験、皮膚の乾燥実験調査）について準実験研究デザインで進めていく。
2. 大学院修士課程論文指導	2017年4月1日～現在まで	1期生題目「在宅の脊髄損傷者の褥瘡発生にかかわるライフスタイルと褥瘡予防の視点からみたセルフマネージメントの実態」 2期生題目「クローン病でストーマを保有する女性の語りにみる妊娠・出産の意思決定プロセス」 3期生は急変を予見する観察力に関する研究、クリティカルケア領域の看護師のレジリエンスに関する研究を指導中である。
3. 和歌山県立医科大学大学院博士後期課程成人保健看護学特論	2017年4月～現在まで	脊髄損傷者の生活支援に関して、褥瘡予防の観点からライフスタイル、セルフマネージメント内容を英文文献検討を通して探求する。
4. 特別研究Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ	2017年4月～現在まで	看護学専攻博士後期課程の研究指導補助として、ゼミに参加し、意見交換を行なっている。
5. 成人看護学Ⅱ	2017年4月～現在まで	創傷ケア、BLS(医療職者としての視点で観察・実施)、ストーマケア、術前看護、呼吸訓練、術後看護（観察、アセスメント）、気管内吸引、事例を使った看護過程展開で構成している。授業前に課題レポートを課し、効果的な演習ができるように工夫している。授業後は実際に演習を行なう理解や実施度を記述させている。適宜、レポートを返却し、理解不十分と考えられる箇所について教員から説明を行なうようにつとめている。
6. 成人看護学実習（急性期）	2017年10月～現在まで	周手術期看護では、術前から術後の生体反応による身体的変化が著しく、その病態や予測される患者への身体的・心理的・社会的影響を学ぶことができる。一方で、急性期は手術を受ける患者のみでなく、慢性期からの急性増悪や救急処置を要する状況でもあることから、臨地実習では受け持ち患者以外でも急性期の現場や、手術室・ICU・HCU・CCUなどクリティカルな現場も可能な限り見学させている。看護過程を展開するうえで、情報収集からアセスメント・分析・問題の明確化・患者の目標と実施計画案を立案できる実習としている。看護専門職をめざす者として、自己の体調管理・時間管理を行い、患者と家族の人権（倫理的態度）を尊重した態度および対応ができるように指導している。
7. 看護エビデンス特論	2017年～現在まで	教員5名のオムニバス形式授業であり、導入から行なっている。1回目は看護実践におけるエビデンス創生に資する研究デザインと研究方法で、2回目は褥瘡発生予測のエビデンスについてcochraneをレビューし、現状とエビデンスを創生する困難さを伝えていく。
8. 成人看護学ⅠB	2016年4月～現在まで	ⅠB（急性）は周手術期看護に焦点化している。消化器、循環器、呼吸器、生殖器、泌尿器、頭部手術前後の看護をその内容としている。予習・復習の重要性を伝え、教科書の事例をもとに病態や症状の成り行き・看護上の問題、看護ケアを思考できるよう、授業展開している。主体的学習と授業への積極的参加を促すため、グループワーク前に課題レポート作成を課し、関連図の作成と発表を行なう時間を設定している。
9. 成人看護学ⅠA	2016年～現在まで	成人看護学ⅠAは急激な変化が理解しやすいことから、周手術期看護に焦点をあてた授業としている。周手術期の概論として、周手術期前期と後期の看護、呼吸器手術、循環器手術、生殖器（乳がん、子宮がん）手術、脳動脈瘤破裂などにもなう開頭術、泌尿器手術を受ける患者の看護を授業内容としている。
10. 生涯発達看護学特論B	2016年～現在まで	生命や健康の危機状況下における患者・家族を総合的に

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
11. 社会人基礎力育成を目指した看護教育の開発	2015年5月～現在まで	捉える基盤となる中範囲理論（危機理論、ストレス・コーピング理論、ボディイメージの分析、エンパワメント、病気の不確かさ理論など）のいずれかを用いて自身が看護で経験した事例をまとめ、授業で討論する。質疑応答を通して問題は何か、今後の課題は何かを導き出す授業を行なっている。英語文献講読を通して、看護実践の科学的意味づけを考える授業も行なっている。
12. 成人看護学概論	2015年4月～現在まで	看護基礎教育においてアクティブ・ラーニングを意識した授業運営を行なうことにより、社会人基礎力の向上を目指すことを目標としている。主に授業、演習において学生間のグループワークによって主体性と対話（コミュニケーション）を促している。コミュニケーションについての自信や意見を述べる力は年次があがるにつれ、自己評価は高くなっている。4年次では、実習オリエンテーション時間を活用し、臨地を模したシミュレーションを取り入れ、学生の臨地実習への準備状況を高める試みを実施している。
13. 生涯発達看護学演習	2015年4月～現在まで	緊急時の対処方法を知り、基本的な応急手当ができること、一次救命の正しい方法を知り、基本的な対処と処置ができることを到達目標としている。講義と演習で構成し、ガイドラインに沿ったBLSの演習、三角巾を用いた包帯法の実施、骨折・捻挫の手当てを演習している。また、災害への対応について、グループワークを行い、主体的学習の基礎力を培えるようにしている。
14. 特別研究	2015年～現在まで	看護実践の場における問題意識から、文献検討、ディスカッションを通して、研究疑問を明らかにし、研究計画立案を達成する。急性期にある成人患者の健康問題、看護を提供する看護師に関する研究疑問を明らかにしていく。
15. 生涯発達看護学総論	2015年～現在まで	生涯発達看護学演習で明らかとなった研究疑問に基づき、課題の明確化から研究倫理審査へのサポート、分析/解釈、論文作成と公聴会（発表会）が行なえるように随時指導を行なっている。平成29年度は質的研究デザインであり、十分な分析・解釈ができたとはいえないが、今後の課題としたい。
16. 共通教育科目 知っておきたい救急処置	2015年～現在まで	生涯発達の視点で対象および家族を理解し、対象への看護上の課題を見出すために意見交換を通して知識・考え方を修得する。1年次から問題意識を整理して研究課題に結び付けられるような機会とさせたい。そのため、急性期とクリティカルな状況における看護活動、家族援助について概説後にグループワークし、院生間での考え方の視点の違いを学ぶ。また、クリティカルケアにおける倫理的課題について考える機会とするため、文献からの事例を提示し、討議し、主体的に考え、施行を深める授業とする。
17. 成人看護論急性期Ⅲにおける授業	2014年4月7日2015年3月	到達目標のひとつは、緊急時の対処方法と基本的応急手当ができることとしており、講義と演習を行なっている。けがによる出血、骨折・捻挫時の副木や包帯の使用法、主な急病時の対応、熱傷時の対応をとりあげている。一次救命ができることも到達目標であり、市民ができるBLSを講義・演習で学ぶ。災害（特に地震）に備えることは重要であり、普段の心得やトリアージ、搬送法についても学ぶ。
18. 成人急性期看護実習	2011年5月9日2014年2月7日	2014年度よりカリキュラム変更にともない、急性期看護論Ⅱは急性期看護論Ⅲへ科目名称が変更となった。演習では学生の学習要素を準備し、学習とその評価を可能とするシミュレーション教育をめざした。看護過程演習では4人1組とし、「胃癌で腹腔鏡補助下にて胃全摘術を受けた患者事例」を2月に配付し、事前の学習指導を行なった。
19. 前期・後期教養セミナー	2011年4月27日2014年4月27日	3年次後期から4年次前期の1年間で3単位135時間の実習計画、実習病棟との指導体制調整、臨地での実習指導、インシデント対応や学習ふりかえり・フィードバックを綿密に行なった。胸部外科（心臓・呼吸器）・乳腺外科・脳神経外科・消化器外科病棟を担当した。在院日数短縮が進む中、患者の個性性をとらえた日々のケア計画、退院指導の経験を可能とするよう調整した。脳神経外科では人としての尊厳を保ち、術後の異常を早期にアセスメントし、リハビリテーションに寄り添える実習を目指した。
		「教養と人間学の領域」カリキュラムにおいて、1年次生の学習に必要な探究心、想像力、思考力を養い、コミュニケーション能力を養うためのセミナー指導を担当した。2011年前期発表テーマは「女性の社会進出についての思索」、後期は「これからの小学校での国語教育」であった。2012年度前期は「色彩心理」、後期が「仏像から学んだこと～仏道と神道～」であった。2013年前期はマハラさんの国連演説文の全文英語資料をもとにセミナーを進めた。香港中文大学学生と英語で討論する機会が

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
20. 成人急性期看護論Ⅱにおける授業	2011年4月22日2013年4月8日	あり、良い経験になっていた。自ら学ぶ能力を培うために、学習方法の指導、双方向討論や学生の自己評価へのフィードバックにつとめた。
21. 早期体験実習における指導	2011年4月18日2013年4月26日	3年次対象、1単位30時間の講義と演習科目で、内容は呼吸機能、脳神経系機能、気管切開術、運動機能、心・血管系機能、消化器系機能、性生殖系機能に障害をもつ患者の看護であった。2013年度は医療の進歩に合わせ、開腹・腹腔鏡補助下で胃切除術を受ける患者の看護、消化管ストーマ造設術を受ける患者の看護を追加した。
22. 急性期看護論Ⅰにおける授業（2年次）	2011年10月7日2014年1月24日	山間地域で生活している人々との関わりを通して、暮らしと環境について理解し、健康との関連について学ぶことが実習目的である。1年次全員がかつらぎ町花園地区で住民との交流を通して医療・保健・福祉・生活のあり様を学びため、自宅訪問を引率指導した。
23. 成人急性期看護学実習	2009年6月3週間2009年7月	急性期疾患または慢性疾患の急性増悪や手術などにより、急性経過をたどる成人患者に対して緊急時に求められる看護と必要なケア技術の習得を教授した。急性期の状況にある成人患者の特徴と看護、急性呼吸不全患者の看護、周手術期看護の概念と患者の特徴、術前看護、術後看護、危機理論、ストレス・コーピング理論を担当した。
24. 臨床実践から得た知識・技術・エビデンスを取り入れたユニークな教育内容・方法の実践	2009年11月30日2010年1月18日	3年次を対象に播磨地域の総合病院において成人急性期看護学実習の指導を行なった。すでに電子カルテや看護診断によるケア計画が導入されていたが、患者の病態理解、ニードのアセスメント、学生ができる技術と教員が援助すべき技術を明確にしながら、指導にあたった。統合実習、保健看護管理実習、早期体験実習にも参加した。
25. 看護総合領域実習計画および初期実習	2008年6月3日2009年11月29日	姫路市内中核病院での皮膚・排泄ケア領域の実践とコンサルテーションから得たケア技術、患者の病態、具体的観察方法、ケア技術を3年生の居宅看護技術演習の教育内容に取り入れた。実際の経験を織り込んで説明し、学生によるロールプレイング演習を指導し、居宅看護技術のあり方や方法を理解でききるようにした。
26. 平成20年度姫路市政策研究費助成事業	2008年5月老人会、コーラス会承認2009年2月18日	2年次対象の看護総合領域実習の施設選定、実習要綱・実習計画作成を行なった。担当した実習病院の地域連携室、介護老人保健施設、居宅サービス事業所で実習を行い、3病棟の統括教員としての役割を担った。
27. まちづくりトーク～次代を担う若者と語る～生涯現役のまちづくり	2008年10月6日2009年2月18日	1年次基礎ゼミ学生6名が取り組んだ「高齢者が生き生きと暮らせるまちづくりを目指す姫路における音楽療法の取り組み」をテーマに老人会、コーラス教室参加者の2群について暮らしの実態調査を比較検討した。その結果をまとめ、高齢者に対する音楽活動の意義と政策推進の提案を行なった。
28. 生活援助技術演習	2007年10月16日2008年2月5日	基礎ゼミ1年生の調査研究「地域高齢者が音楽と触れ合うことによる活性化の効果」から得た学びの中から姫路市と看護大学生との意見交換会を行なった。姫路市では音楽を用いた積極的な取り組みが行なわれていない実態を示し、音楽イベントや幼稚園・小中学校との交流、シニアオープンカレッジ開催を提案した。平成20年度姫路市政策事業成果発表会で発表を実現させた。
2 作成した教科書、教材		
1. 看護教育教材シリーズ：エキスパート向け教材 創傷ケア編	2000年	文部省大学共同利用機関メディア教育開発センター 企画・CD制作 認定看護師制度委員会 創傷ケア基準検討会 内容は、褥創の理解、褥創の予防、褥創に対するケア、全身的なケア、ケアの質保証に関わる活動がタブで分類されている。特に動画画像のタブでは姿勢保持手順などを繰り返し学習できる画期的な教材である。
2. 看護教育教材シリーズ：エキスパート向け教材 ストーマケア編	2000年	文部省大学共同利用機関 メディア教育開発センターの企画・制作CD版 金沢大学医学部保健学科および高岡駅南クリニックの取材協力を得た。 ストーマの基礎知識、成人のストーマ、小児のストーマ、オストメイトの心理的理解とケア、アプライアンス、画像に分類し、各々タブがついており、効果的な学習が期待できる。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 武庫川女子大学看護学ジャーナル編集委員会委員長	2017年5月1日～現在まで	・第3巻の発行 ・全国看護系学校・大学・実習病院への発送 課題は①査読ガイドラインの見直し、2 査読結果後の査読者と著者間の調整およびサポート ③教育研究業績デ

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
2. 臨地実習委員会委員長	2015年4月1日～2017年4月30日	データベース作成 ④学会開催報告や地域貢献活動について掲載の続行 ⑤博士後期課程生の論文掲載の役割を果たす。 ①設置準備室で用意された実習病院・施設の実習確約や実習環境・受け入れ用件の整理 ②実習期間の変更や病院の再編・統合があるなどによる情報収集の整理③臨地実習支援室との業務分担 ④臨地実習共通要項作成 ⑤学生の感染対策の大幅な修正 ⑥インシデント時の連絡ルート ⑦臨地実習連携会議開催 課題：①予算の配分の明確化。2年目の10月にした。
3. キャリア委員会委員	2015年4月1日2017年4月30日	2年間のキャリア委員会委員として大きな活動はできなかった。委員会で看護学科も共有すべき内容ができれば、教授会や学科会議で報告した。
4. 教務委員会委員	2015年4月1日～現在まで	教務委員会で審議することは大変多く、現4年生の卒業と国家試験合格、就職までは様々な問題が生じるが、学生の利益を考えた対応を協議している。また、実習委員会との連携を密にとることも必要であり、分野内での協議結果を審議項目にあげている。
5. 史資料調査学科委員	2015年～現在まで	学院創立80周年記念事業として、ミュージアム記念館に各学科より展示物を収集することになっている。武庫川学院の歴史を裏づけ、それらをふまえた展示を公開、教育・研究成果の情報発信をめざしている。本学科としても完成年次を迎えることもあり、何を残して公開していくか、協議結果を伝えていく。
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 皮膚・排泄ケア認定看護師	2014年10月1日	第3回目更新
2. 日本看護協会認定WOC看護認定看護師	1999年6月21日	
3. ET(Enterostomal Therapist)資格取得	1989年7月22日	
4. 看護師免許	1975年5月21日	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 第7回和歌山県在宅褥瘡ネットワーク委員会セミナー講師	2014年2月16日	和歌山県内の訪問看護ステーションに勤務する看護師、病院に勤務する看護師を対象に在宅褥瘡治療とケアに関するセミナーの講師をつとめた。本セミナーは、在宅褥瘡管理者資格取得のための必修講習である。
2. 日本褥瘡学会近畿地方会学術集会 ハンズオンセミナー講師	2013年3月10日	
3. 日本看護研究学会第25回近畿・北陸地方会学術集会 看護セミナー講師	2012年3月3日	
4. 医療法人社団清和会 笹生病院 卒後研修 講師	2012年12月7日	
5. Shandong-Wakayama Medical & Nursing Symposium 2012	2012年11月5日	
6. 医療法人社団清和会 笹生病院 卒後中堅者看護研修 講師	2011年10月14日	
7. 中播磨看護連絡会研修会 講師	2009年11月14日	テーマ：家族看護の考え方と実際
8. 日本褥瘡学会・在宅褥瘡医療ネットワーク第一回褥瘡学術セミナー兵庫 講師	2008年2月24日	
9. 第6回島根県創傷ケア研究会 教育講演 I	2008年10月11日	
10. 島根県看護協会「スキンケア」研修会講師	2007年9月19日	
11. あこうプラザ21 第7回例会 介護研修	2007年11月16日	
12. 大阪府看護協会救急看護認定看護師教育課程 講師	2006年7月27日2006年8月3日	創傷ケアフィジカルアセスメント
13. 大阪赤十字病院看護フォーラム 講師	2005年9月1日	テーマ：褥瘡ケア 予防と対策
14. 大阪赤十字病院看護専門学校 基礎看護学援助論 講師	2005年3月9日	テーマ：主要症状別看護 褥瘡
15. 大阪府看護協会 訪問看護推進事業・相互研修 講師	2005年12月22日	テーマ1：褥瘡の管理 在宅訪問看護の視点から テーマ2：ストーマの管理 在宅訪問看護の視点から
16. 大阪赤十字病院専門学校 成人看護学援助論 I	2004年9月15日2004年9月29日	ストーマケア、ストーマ受容について臨床事例を用いて講義した。
17. 愛媛県立看護専門学校 特別講義 講師	2004年12月1日	・ストーマリハビリテーション看護 ・看護における創傷ケアの技術
18. 大阪赤十字看護専門学校 成人看護学援助論 I	2003年6月16日2003年6月24日	消化器系、腎・泌尿器系のストーマケア

職務上の実績に関する事項			
事項	年月日	概要	
3 実務の経験を有する者についての特記事項			
19. 兵庫県立加古川病院 褥瘡対策研修会 講師	2002年10月4日	「認定看護師－看護スペシャリストの役割と機能」をテーマとし、実務経験および認定看護師教育課程教員としての経験から今後さまざまな分野のスペシャリストが誕生していくことを講演した。	
20. 兵庫県看護協会但馬支部研修会 講師	2001年6月23日		
21. 兵庫県看護協会但馬支部研修会 講師	2001年6月23日		
22. 兵庫県立高等学校衛生看護科2年生民間人材登用講演会「ストーマケア」	1994年2月18日		
23. 但馬外科集談会 人工肛門シンポジウム	1994年10月8日		
24. 兵庫県立高等学校衛生看護科3年生 民間人材登用講演会 「ストーマケア」	1993年6月23日	准看護師養成校にストーマケアの科目はなく、所属していた病院での実習生であったことから、講師として招聘され、講義を行なった。	
4 その他			
1. 武庫川女子大学附属高等学校スーパーサイエンス科学演習実験Ⅱ 講師	2017年5月16日	寝心地を目でみてみよう	
2. 武庫川女子大学附属高等学校スーパーサイエンス科学実験Ⅱ講師	2016年9月13日	寝心地を目でみてみよう	
3. 医療法人協和会 新人看護職員臨床研修企画・実施	2013年8月4日2013年8月11日	テーマ：スキンケアⅠ・Ⅱ研修	
4. DESIGN-Rを使った褥瘡ケアの展開	2013年12月	医療法人協和会 千里中央病院褥瘡研修会	
5. ジェネラリスト訪問看護師を目指して ラダーⅠ・Ⅱ合同集合研修 講師	2013年10月	医療法人協和会ウエルケア事業部研修	
6. 医療法人協和会 協立病院看護研究発表会 講師	2011年3月5日	<ul style="list-style-type: none"> ・ラダーⅢ～Ⅳ以上の看護師対象 ・テーマ「より良い論文にするための査読のすすめ方」 スキンケア研修事例検討グループワーク 老人看護CNSを非常勤で招き、老人看護（主に認知症看護）研修を行なった。 テーマ：研究論文を読む テーマ：スキンケア研修Ⅲ	
7. 医療法人協和会 第二協立病院看護研究発表会講師	2011年3月11日		
8. 医療法人協和会看護部「査読研修」講師	2011年1月12日		
9. 医療法人協和会 卒後2年目研修気価格 講師	2010年9月1日2010年9月8日		
10. 医療法人協和会 老人看護を極める研修 企画・運営	2010年7月22日2011年3月20日		
11. 医療法人協和会 協立病院看護部研修会 講師	2010年7月21日		
12. 医療法人協和会 新人看護職員臨床研修 講師	2010年12月1日2010年12月8日		
13. 医療法人協和会 創傷看護ゼミナール研修 講師	2010年11月10日2011年3月9日		
14. 医療法人協和会 看護研究における統計処理研修 講師	2010年10月28日		
15. 姫路聖マリア会 老人保健施設マリア・ヴィラ 褥瘡対策研修会 講師	2008年2月21日		
16. 姫路市訪問看護ステーション連絡会研修企画・実施	2008年11月21日		会場：近大姫路大学
17. 協立病院第23回院内看護研究発表会講評	2008年11月16日		
18. 第8回デディケアセミナー パネリスト	2005年6月1日		テーマ：ストーマスキントラブルのアセスメントと対応策
19. なにわ創傷ケアフォーラム	2005年2月19日から2007年3月17日		年1回、3年間開催した。
20. 米国感染管理専門家協会Basic Training Course 修了	1994年11月6日1994年11月12日		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. はじめてでもやさしいストーマ・排泄ケア	共	2018年3月5日	学研メディカル秀潤社	新人看護師を対象に、ストーマケアと排泄ケアの基礎知識から実践、根拠をわかりやすく執筆し、大幅に写真・図を多くした。皮膚・排泄ケア認定看護師13名による書である。
2. やさしさの在宅ケア 在宅における褥瘡ケア	共	2009年7月25日	ふくろう出版	後期高齢者と要介護者増加に伴い、健康寿命の延伸策への関心が高まっている。地域で暮らすことをどう支援するか、が焦点である。褥瘡の基礎知識、予防、在宅でできる褥瘡ケア、特にリスクアセスメント、スキンケア、ポジショニング、湿潤予防、乾燥予防、寝た切りにならないリハビリや福祉用具の活用を記した。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
3. 外来がん化学療法を始める大腸癌術後オストメイトのストーマ管理	共	2006年6月	日総研出版 総合消化器ケア	大腸癌術後にがん化学療法を受ける患者の症状・心理・身体的問題について、皮膚・排泄ケア認定看護師とがん化学療法看護認定看護師の協働によって情報を共有し、患者への支援を行なった。がん化学療法看護認定看護師から得られる有害事象の判断や医師への報告、皮膚・排泄ケア認定看護師の心理的支援やストーマ管理が行なえた。さらに他職種間コミュニケーションがとれるシステムの構築が求められる。
4. 創傷ケア基準シリーズ3 スキンケアガイダンス	共	2002年9月1日	日本看護協会出版会	WOC看護の焦点は看護の基本である看護技術の「清潔」に関連した皮膚のケアが基盤となっている。皮膚は人体を外界から守る外套の役割をしているが、昨今の急速な医療技術の進歩や環境の変化に伴って皮膚表面も傷つけられている。本書では症候別、ハイリスク患者別、皮膚障害別にメカニズム、アセスメント、ケアの目標、ケア方法を展開した。
5. 創傷ケア基準シリーズ2 瘻孔・ドレーンのケアガイダンス	共	2002年5月20日	日本看護協会出版会	瘻孔ケアは、ストーマケアの予防的スキンケアならびにパウチングなどの知識と技術を駆使した創傷治療環境を整えるケアである。コストパフォーマンスを高め、クライアントの心身の苦痛を軽減し、活動範囲の拡大とQOLの向上を目的とする。多様な病態をもつ瘻孔のケアには、栄養管理・感染管理などで専門家とのコラボレーションが必要であり、クライアントやヘルスチームメンバーへの教育はケアを継続し、合併症を予防するうえで重要な活動である。
6. 認定看護師プロの技	共	2001年8月	月間ナーシング・トゥデイ	日本看護協会は1996年から専門領域で高度な実践能力をもつ看護職を育成すための認定看護師教育を始めた。教育課程プログラム、専門技術内容を開設し、創傷被覆材選択などの医行為範疇が認定看護師に期待される発展を示唆している。
7. 創傷ケア基準シリーズ1 褥創ケアガイダンス	共	1999年5月20日	日本看護協会出版会	褥創ケアに関連した定義や分類について示し、褥創ケアの内容については、「褥創予防」「褥創に対するケア」「全身的なケア」「ケアの質保証に関する活動」に大きく分けて実際に著した。褥創ケアの方法を決定する手引きとして利用できるように構成した。
8. チャレンジ！ワーキングストレッチ	共	1997年10月	日総研出版	WOC看護技術の一つであるストーマケア技術を事例を用いて解説した。尿路系ストーマ皮膚障害である、浸軟、PEH、真菌感染をとりあげた。看護上の問題、問題となる理由、ケアの根拠を説明した。
2 学位論文				
1. 褥瘡予防の観点からみた背あげ座位における臀部下挿入クッションの臀部圧迫力とずれ力軽減についての臨床的検証	単	2010年3月	日本褥瘡学会誌	
2. 車椅子座面形状の違いが高齢者の座圧と皮膚血流におよぼす影響	単	2003年3月	日本看護研究学会、日本褥瘡学会	
3 学術論文				
1. 急性期看護実習における学生が主体となって行なった看護行為の実態と課題(査読付)	共	2017年8月	和歌山県立医科大学保健看護学部、和歌山県立医科大学保健看護学部紀要	急性期看護実習に参加した学生にアンケート配付し、回収数207人の分析を行なった。学生が主体となつて行なった看護行為の経験率が高かったのは、清拭、洗髪などの清潔ケアであり、術後患者が創部やドレーン挿入などにより、介助の必要性が高く、その機会が多いことが考えられた。輸液ポンプの観察について経験が非常に少ないのは、受け持ち患者の輸液管理に輸液ポンプが必要でない場合もあると考えられる。学内演習の活用と臨地実習での調整や協働が必要である。
2. 臥床高齢者の足部掛布団有無による足部皮膚保持効果の評価(査読付)	共	2017年11月	看護人間工学部会	健康な男性9名、女性10名を対象に人工気象室にて布団有無による足部皮膚温度の変化を調べた。布団被覆直後から足底温度の立ち上がりがあり、約8分後に63%に達し、29分後には胸部温度とほぼ同じになった。被覆除去後、足部の動脈静脈吻合の収縮反応により、急速な皮膚温度低下がみられた。いったん冷えると温度が戻りにくいという特徴があった。
3. 長期臥床高齢者における自律神経活動の実態(査読付)	共	2016年6月	第15回日本看護技術学会学術集会	19名対象者は全て日常生活自立度Cランクであった。24時間心拍測定を行い、自律神経活動機能が足部周囲環境を受けやすい状況にあるかを検討した。心拍変動を示すAverage Inter-beat Interval(以下Ave IBI)は夜間に高く、明け方にかけて低い値を示す傾向がみられた。
4. JSPU Guidelines for the Prevention and Mngement of Pressure Ukcrcers(4th Ed.)	共	2016年10月	日本褥瘡学会誌編集委員会、日本褥瘡学会誌第16巻	検索期間は1980年から2014年6月までで、採択基準はシステムティック・レビュー、臨床試験、ランダム化比較試験の文献を優先し、それがない場合は、コホート研究、症例対照研究などの観察研究の文献を使用した。担当したCQは発生予測であり、あらたに

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
5. 褥瘡予防・管理ガイドライン（第4版）	共	2016年10月	日本褥瘡学会誌編集委員会、日本褥瘡学会	追加したCQはなく、推奨度も変わらなかった。 The Japanese Society of Pressure Ulcers (JSPU) has compiled an English version of the updated edition of the Guidelines for the Prevention and Management of Pressure Ulcers. The Guidelines set forth here a collection and discussion of medical issues specific to Japan as well as new evidence from research conducted abroad. Clinical questions (CQs) and their analyses were organized in the order of treatment followed by prevention: topical agents, dressings, surgical intervention, general management, rehabilitation, risk assessment, skin assessment, skin care, repositioning, support surfaces, patient education, outcome management, and QOL/pain. Each recommendation was assigned one of five ratings (A, B, C1, C2 and D). The present guideline provides the best and most comprehensive recommendations currently available to health care professionals worldwide.
6. 褥瘡の予測評価	共	2015年8月	照林社、褥瘡ガイドブック第2版	予測妥当性の高いリスクアセスメントスケールを使用することを推奨した。ガイドラインに準拠した臨床上の疑問について具体的に述べ、リスクアセスメントスケールの種類と評価項目一覧表を掲載した。OHスケール、K式スケール、プレーデンQスケール、SCIPUS、在宅版K式スケールについて解説した。
7. 循環器疾患患者を対象とした慢性期看護実習における学生の学び	共	2015年7月	日本看護教育学会誌	分析対象とした学生は40人であり、慢性期看護実習を履修した学生の最終レポートを内容分析した。学生は受け持ち患者である循環器疾患患者への看護を通じて、慢性期看護に必要な支援の内容を学び、その支援の難しさを感じていた。支援に必要な関わり方や看護に求められる姿勢についても学んでいた。
8. 褥瘡早期判別に着目したガラス板法による発赤の色変化応答と電気インピーダンスの関連(査読付)	単	2015年3月	和歌山県立医科大学保健看護学部、和歌山県立医科大学保健看護学部紀要	骨突出部に発赤のある23人を対象とし、電気インピーダンスを測定した。発赤色応答 (BE: 消褪する発赤、NBE: 消褪しない発赤、partial NBE: どちらともいえない発赤) での違いを調査した。BEの色応答群ではNBE群と比較して有意差があり、毛細血管拡張による血液量増加、間質液量増加、内出血、浮腫が起こった状態で生じた結果と考えた。
9. クッション組み合わせによる側臥位ポジショニングの体圧分散と安楽におよぼす影響	共	2015年3月	和歌山県立保健看護学部、和歌山県立医科大学保健看護学会誌	側臥位では体位保持のためにクッションを使用する頻度が高く、安楽性と体圧分散性の両面からポジショニングを検証した。体圧測定にはHUGE-MAT (ニッタ社) を用い、クッションはピロー、ミニ型、プーマランを使用した。分析にはピーク圧、平均圧を算出し、主観的評価には主成分分析、セマンティック・プロフィールを用い、検討した。体圧分散に優れたポジショニングが必ずしも安楽とは限らず、下腿と骨盤部の体圧分散、動きやすさ、安定感の改良が必要であると示唆された。
10. 布団被覆時の血流と皮膚表面温度・湿度、寝床内温度・湿度との関係—高齢者を対象とした踵骨部での検討(査読付)	共	2015年10月	看護人間工学研究会誌第16巻	褥瘡好発部位である踵骨部において、かけ布団を被覆した際の血流の変化と皮膚表面温度・湿度、寝床内温度・湿度との関係を検討した。高齢者16名を対象とした結果、全変数において、被覆前に比べ被覆後の値が有意に高くなったが、踵骨部の変化は母趾下に比べ有意に小さかった。血流量の変化と皮膚表面温度の変化に正の相関が認められ、被覆による血流増加と温度上昇の関係が確認された。
11. 熱刺激を用いた皮膚血流評価手法の検討(査読付)	共	2014年9月5日	日本人間工学会看護人間部会	褥瘡の初期症状であるI度褥瘡の判断は、目視による観察等で行い、直接的に皮膚の血流を評価するものではないため、その判断は難しい。熱刺激を与え、皮膚表面温度応答から血流量を推定する手法を考案した。健康高齢者 (n=20) は0.991±0.505であり、臥床高齢者 (n=8) は0.368±0.163であった。本手法は血流が減少している状態を捉えており、血流評価手法として妥当であると考えられた。
12. JSPU Guidelines for the Prevention and Management of Pressure Ulcers (3rd Ed.)	共	2014年2月20日	日本褥瘡学会誌編集委員会、日本褥瘡学会誌第16巻	The Japanese Society of Pressure Ulcers (JSPU) has compiled an English version of the updated third edition of the Guidelines for the Prevention and Management of Pressure Ulcers. The guidelines set forth here include a collection and discussion of medical issues specific to Japan as well as new evidence from research conducted abroad. Clinical questions and their analyses were organized in the order of treatment followed by prevention: topical agents, dressings, surgical intervention, general management, rehabilitation, risk assessment, skin care, repositioning, support surface, patient education, outcome management, and QOL/pain.

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
13. 電気インピーダンス計測からみた消褪しない発赤・I度褥瘡判定の妥当性の検討	共	2013年8月	日本看護研究学会第39回学術集会	目視による発赤はI度褥瘡の早期発見に重要であるとされている。しかし、目視による判定にはばらつきがあることから、発赤皮膚の電気インピーダンスを測定し、電氣的抵抗から組織損傷や変化をとらえようと考えた。発赤が白く消褪しないNBEと判定されても必ずしも水分増加を伴わないことや治癒過程による水分減少が起こっている可能性が示唆された。
14. 急性期看護実習における手術室とICU見学実習導入の試み-学生の達成感と記述内容の分析から(査読付)	共	2013年3月	和歌山県立医科大学保健看護学部紀要	自記式質問紙調査により、165人の学生から回答を得た。手術室・ICU見学が、急性期の患者の理解、援助の必要性をとらえる学びをしており、見学実習の意義を認めることができた。
15. 皮膚モデルの逆問題解析による皮膚血液流量推定方法の開発(査読付)	共	2012年8月	生体医工学会誌	皮膚表面の温度応答を解析し、皮膚血流量を皮膚の見かけの温度伝導率で評価することができる装置を開発した。実証実験により、皮膚血流量と温度伝導率との間に線形関係があることを明らかにした。臨床応用として、褥瘡の発生危険度と温度伝導率との関係を探り、高速に解析を行なうために生体熱移動数理モデルの構築、逆問題解析による皮膚血流量を推定する手法の開発を行なった。
16. 褥瘡予防・管理ガイドライン(第3版)(査読付)	共	2012年7月	日本褥瘡学会誌編集委員会、日本褥瘡学会誌第14巻	褥瘡管理に関わる全ての医療者が、それぞれの医療状況において、褥瘡の予防・管理をめぐる臨床判断を行なうあらゆる局面で使用するために、現時点で利用可能な最良のエビデンスに基づいて推奨項目を提示した。日本褥瘡学会学術委員会の委員としてガイドライン改訂委員会に携わり、「褥瘡発生予測」を担当した。第2版以降に発行された文献レビューを行い、CQ、推奨度、推奨文、解説を執筆した。
17. 円筒熱源を用いた皮膚血流評価装置の開発とその生体応用(査読付)	共	2011年11月	バイオメカニズム学会	皮膚モデル開発、逆問題解析による未知パラメータである血流量を直接推定する手法の開発を行い、実証実験により手法の妥当性を検証した。試作装置の再現性実験では、変動係数は4%であり、観測データと数値計算データの適合度は96%であった。
18. 臥床高齢者と健康高齢者における布団被覆時の足部血流変化の比較(査読付)	共	2011年11月	バイオメカニズム学会	布団被覆による推定血流量変化は、健康高齢者に比べ臥床高齢者の増加は1/2程度であり、布団の被覆を取り除いた後の変化も健康高齢者の1/2であった。臥床高齢者は足部の血流循環量が健康高齢者よりも少ないため、布団被覆時の熱移動が少なかったと考えられる。臥床高齢者の被覆除去後の変化の乏しさは血管反応の低さを示している。
19. 皮膚血液循環評価装置の開発とその臨床応用(査読付)	共	2010年10月	バイオメカニズム学会、バイオメカニズム学会誌	局所皮膚領域生体熱移動モデルを開発し、その妥当性を確認した。温度伝導率と血流量との間に線形関係があることを明らかにした。これにより、皮膚血液循環状態を評価できる可能性を示すことができた。
20. 陰圧閉鎖療法によるポケットのある仙骨部難治性褥瘡の改善症例	共	2008年12月	近大姫路大学紀要創刊号	日常生活自立度C2、レビー小体型認知症のある70代女性の仙骨部褥瘡(ポケットあり)に対し、陰圧閉鎖療法を行い、1.5カ月後にDESIGN点数は8点減少した。ドレナージ促進、肉芽促進、壊死組織除去の効果がみられた。
21. 訪問看護ステーションにおける褥瘡患者の実態-在宅医療委員会実態調査報告2-	共	2007年10月	春恒社、日本褥瘡学会誌	日本褥瘡学会在宅医療委員会が行なった調査データを分析した。有効回答の在宅褥瘡患者は4,144人で、要介護5は59.2%で、StageⅢ・Ⅳは42.5%であった。主な介護者は配偶者・家族が87%であり、体位変換を全くしないか数回程度が67%であった。在宅には重症度の高い褥瘡が多く、介護者の負担が大きいたことが明らかになった。
22. 45°ヘッドアップ時の臀部下挿入クッション濃霧が寝たきり高齢者の坐骨部圧迫力とずれ力および経皮酸素分圧におよぼす影響(査読付)	共	2007年10月	春恒社、日本褥瘡学会誌	圧迫と摩擦・ずれの作用の臀部に働く力におよぼす影響をヘッドアップ45°の座位で検証した。入院高齢者31名を対象とし、cross-over比較試験を行なった。臀部下にクッションを挿入することにより、圧迫力とずれ力軽減があり、TCP02の回復は有意に高かった。
23. ターミナル期のリスクアセスメントに何をを用いるか	共	2005年	中山書店、EBナーシング	ターミナル期患者のリスクアセスメントツールには予測妥当性の点で問題が残る。開発途中にあるハンターズ・ヒル・スケール、HoRTスケールの陽性的中率は50%であり、ターミナル期のツール開発には創傷エキスパートの意見も重要な根拠となる。今後、リスクファクターの抽出を行なう前向き研究によって予測妥当性の検証を行なうことが期待される。
24. 病院におけるステージⅢ・Ⅳの褥瘡患者に対する治療・ケアの実態からみた看護ケアの課題(査読付)	共	2004年6月	春恒社、日本褥瘡学会誌	150床以上の77病院から有効回答を得た(n=219)。体圧分散マットレスが使われていたのは6割で、滲出液の多い創に精製白糖ポビドンヨード剤を使う割合は有意に多く(p<0.01)、壊死組織のない創には肉芽・上皮形成促進剤を使う割合が有意に多かった(p<0.05)。創傷被覆材使用有無と創状態との関連はみられなかった。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
25. 創傷・オストミー・失禁看護認定看護師の看護ケアの実態と退院促進効果	共	2000年6月	日本看護協会出版会、 かんご	創傷・オストミー・失禁（WOC）看護認定看護師の臨床導入前後の看護前後の看護ケアの実態を比較した。セルフケア確立は導入前が4.1週で、導入後が3.0週であり、退院促進に大きく寄与していた。
26. 創傷・オストミー・失禁看護認定看護師の活動と成果—アンケートによる本人からみた業務内容および婦長からの評価（査読付）—	共	1999年11月	日本創傷・オストミー・失禁ケア研究会誌	WOCナース活動の94%は局所ケアであり、WOCナースはスタッフへの相談対応と指導を行っていた。婦長の67%は「看護スタッフの士気向上」に貢献していることを認めていた。
27. 手術患者の不安の軽減に対する術前訪問の有効性（査読付）	共	1996年9月	日本看護協会、日本看護学会集録成人看護	婦人科手術を受ける患者を対象に手術室看護師による術前・術後訪問を行い、不安の程度をSTAIによって測定した。
28. 創傷ケアの実践と考察（査読付）	単	1996年10月	公立豊岡病院紀要	1989年から1996年までETナースとしての創傷ケア実践をまとめた論考である。
29. 日本における専門看護婦制度の動向について（査読付）	単	1994年10月	公立豊岡病院紀要	ET研修を終えて、ストーマケア・褥瘡や瘻孔ケアを実践するようになって以降、ジェネラルナースと専門的技術・知識をもって看護ケアを提供できる専門看護婦育成の方向性が打ち出されてきた。当該時点のモデルに基づいて、看護組織や看護提供方法についての考えを論じた。
30. ストーマ形成術の適応とQOLにおける有用性について（査読付）	単	1993年5月	STOMA	結腸ストーマ造設語にストーマ狭窄を生じ、セルフケア困難となった3症例に対しストーマ形成術が行なわれた。術後のQOL評価では、地域住民との社会関係保持、社会経済状態や心理状態面が改善していないという問題が残された。
31. 創傷のケアと管理について（査読付）	単	1993年5月	公立豊岡病院紀要第7号	1989年から1995年までETとして行なった創傷ケアについてまとめた。ほぼ69%を占めるストーマケア以外に、慢性開放性創傷である褥創や糖尿病性足壊疽は24%と少ないが、長期にわたるケアを要した。基礎疾患および全身の内的因子や外的因子に強く影響され、感染を併発したため、感染対策は創傷ケアの重要な位置を占める。看護の役割は創傷治癒のみでなく、複雑な要因をもつ人間の平衡維持への支援である。看護用具の検討、基礎知識の教育と予防的管理が重要課題である。
32. 陥没結腸ストーマの狭窄と周囲皮膚の癬痕性肥厚をきたした症例の経験（査読付）	単	1992年10月	STOMA	S状結腸癌でS状結腸切除と回腸30cm切除術を受けた患者事例である。水様性下痢が続いたため、ストーマ周囲の癬痕、肥厚化、ストーマ狭窄に至った。フィンガーブジーは効果がなく、患者の意思決定に基づきストーマ形成術を行なった。術後のストーマ管理は良好でQOLも向上した。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 長期臥床高齢者における心拍変動の実態	共	2018年3月	日本看護研究学会第31回近畿・北陸地方会	病院に入院している日常生活自立度Cランクの患者20名の心拍数を眠りSCANを用いて測定した。日中は夜間よりも大きく変動し、夜間は低下し始め、朝方にかけて上昇するという変動がみられた。正常なサーカディアンリズムと類似していた。ADLが低い人ほど正常なサーカディアンリズムが失われるという結果も報告されており、周期性の違いと寝床内気候への影響を検討する必要がある。
2. Testing Vldidity of evaluating skin blood perfusion by our developed device in seniors.	共	2017年7月28日	Sigma Theta Tau International's 28th International Nursing Research Congress	We experimentally tested the validity of evaluations made with our new device and compared its estimated skin blood perfusion with the measured values of the Laser Tissue Blood Flowmeter of the feet of participants covered by a blanket, which was a Japanese futon. We comfermed the ability of our new device to evaluate skin blood perfusion. We will be able to objectively and easily predict pressure ulcer developments.
3. Early detection of stage I pressure ulcers identifying non-blanchable erythema using electric impedance	共	2017年7月28日	Sigma Theta Tau International's 28th International Nursing research Congress	The purpose of this study was to examine the relevance of impedance measurement for classifying complete NBE or partial NBE or BE. The difference of impedance data between complete NBE (Non Blanchable Erythema), partial NBE or BE (Branchable Erythema) and each opposite healthy local area to erythema were analyzed by ANOVA. Fianlly, to improve the accuracy of impedance difference, derived formula of total deviations which were removed erythema size effect were used.
4. Comparison of Skin Temperature and Bed Climate of Bedridden	共	2017年7月28日	Sigma Theta Tau 28th International Nursing	Participants:20hospitalized, bedridden patients who required assistance in excretion, eating, and

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
Elderly Patients in Summer and Winter			Research Congress	changing their clothes. Researchers compared the skin surface temperature and humidity of the feet of bedridden elderly patients covered by a blanket in summer and winter. The changes in the temperature of the feet's sole due to the presence or absence of a blanket were small in the summer after it was removed, and fluctuation in the winter was large. The time required for the temperature change also quickly reached an equilibrium state in the summer, but it continued to change during the measurement time in the winter.
5. 骨突出モデルによる高機能エアーマット/45度頭側挙上での沈み込み調査-ベッドメイキングによる比較-	共	2017年3月	日本褥瘡学会第14回近畿地方会	重度病的骨突出者に対する褥瘡予防ケアを開発するため、高機能エアーマット上で仙骨突出モデルを使用して、「シーツなし」「処理なし」「コーナー法」「結ぶ法」の4つのベッドメイキングの45度頭側挙上でのハンモック現象の発生調査を行なった。最もシーツの張りが強いと予測した「結ぶ法」においても明らかなハンモック現象は生じなかった。
6. Current Status and problems Concerning Fundamental Competencies for Working Persons among First-year Nursing Students in University	共	2017年3月	The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars	Results showed that FCWP(Fundamental Competencies for Working Persons)and CC(Communication Competencies)students varied widely among FCWP was lowest in all students. There is a continuing need to conduct group work with an awareness of active learning in the classroom to improve upon the weaker points and overall ability.
7. アンブルカットにおける受傷者の動作解析	共	2017年11月	看護人間工学会	アンブルカット未経験者20名を対象とした。アンブルカットで受傷するかしないかは、アンブルが折れた直後の一瞬で決まるため、受傷しないためにはアンブルが折れる瞬間に左右の手掌を勢いよく離す動きが必要である。アンブルカットにおいては、非利き手でアンブルの胴部が斜傾しないように固定したうえで、利き手の回外と伸展の動きを利用する方法がよい。
8. 臥床高齢者の布団被覆前後における足底皮膚表面温度について	共	2016年9月	日本褥瘡学会誌、第18巻	足部は周囲の環境により血流の増減が生じやすいが、臥床時の布団被覆による影響については検討されていない。日常生活自立度Cランクの患者19名を対象に布団被覆・除去時の足底表面温度を測定した。布団被覆前後では、外気温の影響によって足底皮膚表面温度が変化することが明らかとなった。看護ケアのときに布団をはずす機会がある場合、皮膚温の低下に留意する必要がある。
9. 慢性期看護実習において呼吸器疾患患者を受け持った学生の学び-実習レポートの分析より-(査読付)	共	2016年7月	日本看護研究学会雑誌39巻	呼吸器疾患患者の療養行動の継続に関する内容が多くみられたことから、受け持ち患者の残存している呼吸機能を維持するために、退院後も療養行動を継続するための援助を中心に関わっていた。受け持ち患者の心理面を支えることや、看護師として大切な姿勢について学びを深めていた。慢性疾患に罹患したことによる患者の精神的な揺れや苦痛を理解することの重要性も学ぶことができていた。
10. 下腿部の掛け布団有無による足部皮膚温保持効果の評価	共	2016年11月5日	日本人間工学会、第52巻	人工気象室にて高齢者男女各10人(n=20)の布団被覆30分間、除去後15分間の足底表面温度を測定した。被覆時の足底温度は一次送れ応答の変化をたどり、25分後に胸部皮膚温度と平衡状態に達した。時定数は約8分であった。布団除去時には急速な立下りがあり、足部動脈吻合の収縮反応による低下と考えられた。
11. 下腿部の掛け布団の有無による足底湿度の変化に関する研究	共	2016年11月5日	日本人間工学会	下腿部の掛け布団の有無により寝床内環境および皮膚湿度がどのように変化するかを調査した。角質水分量の内部供給が少ない高齢者にとって、下腿部に被覆のない状態は皮膚乾燥を亢進させることが示唆される。布団被覆後に湿度上昇と下降群に反応が分かれたのは、上昇群では接触刺激に強く反応しているため、開放による温度変化に対して刺激を受けたと考えられる。下降群では開放による発汗反応はなく、室内湿度の影響を受け低下したと考えられる。
12. 高機能エアーマットの頭側挙上で病的骨突出の仙骨部に起こる変化	共	2016年11月5日	第24回看護人間工学会2016	藤本かおり、竹村実紀、宮嶋正子 骨突出部も皮膚は薄く、脆弱で褥かさは発生しやすく難治性であるため、予防のために厚みのある高機能エアーマットを用いる。45度頭側挙上をしたときの仙骨部は上半身が下方に移動したため、上半身の体重が大腿方向へ移り、仙骨突出部の圧の上昇はなかった。この下方移動により仙骨突出部にはずれ力が加わり血流減少をきたすことが示唆された。
13. 高機能のエアーマットの頭側挙上で病的骨突出の仙骨部に起こる変化(査読付)	共	2016年11月	看護人間工学会誌	病的骨突出がある患者では、高機能エアーマットを用いても仙骨部の圧は高いが、頭側挙上によって極端に上昇することはなかった。しかし、仙骨突起部のずれ幅は大きく、褥瘡発生のリスクが高いことが

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
14. アクティブラーニングを意識した授業運営後の看護系大学1年生の社会人基礎力の現状	共	2016年	日本看護学会 看護教育	明らかになった。 看護師を目指す学生にとって社会人基礎力の底上げは必要である。1年次の授業にグループワークを取り入れ、アクティブラーニングを行なった経験から他者の考えに触れ、その関わり方や意見交換の必要性などを認識する経験につながっている様子があった。自分の考えを深めることやコミュニケーション力の低さなど、近年の看護学生の特徴とされる項目が抽出され、学生が自分に不足している点を改めて客観的に捉える機会となった。
15. 集中治療室入室患者の仙骨部・踵部角層水分量におよぼす影響因子の検討	共	2015年8月29日	日本褥瘡学会誌編集委員会	対象者は14人で、ICU入室者の角質水分量は平均血圧、SpO2と腋窩温との影響が示唆され、呼吸状態や循環状態との関連の可能性がある。仙骨部と比べて踵部皮膚は乾燥しており、踵部の適度な保湿および外力を低減するケアが必要である。APACH II スコアの平均は12.3±5.7点であった。
16. 膵臓外科手術を受けた患者の術後2週間までの痛みとストレスの変化	共	2015年8月	日本看護研究学会雑誌	痛みのVASについて、術後創部痛評価を目的として調査した。術前において平均5.5であり、膵臓がん症状の特徴として腹痛や腰背部痛および高齢者がもつ腰背部痛や膝・肩関節痛が影響した可能性があった。術後1日目まで有意に高く、術後24時間を最高に軽減した。
17. Changes in pain and feelings of patients undergoing pancreatic surgery until 3 days after Surgery	共	2015年10月	European Nurse Directors Association & World Academy of Nursing Science 2015	術前から術後7日目にかけての5つの時点でSTAI, 痛みのVAS、唾液アミラーゼ活性を測定し、膵臓外科手術を受ける患者のストレスを評価した。術前から術後にかけてSTAIに変化はなく、その値は中程度の不安を示す値であった。痛みのVASは術後1日目をピークに以後低下した。腹腔鏡群と開腹群での比較では、VASでは7日目、唾液アミラーゼ活性は術後3日目に両群間に有意差があった。腹腔鏡補助下での手術の方が開腹での手術より患者の抱えるストレスが少ないことが示唆された。
18. 消褪しない発赤部位の電気インピーダンス計測	共	2014年8月29日	日本褥瘡学会誌編集委員会、日本褥瘡学会誌第16巻	消褪しない発赤 (NBE) と判定したインピーダンスのコントロール部位との差 (減少率) は有意に大きく、水分増加状態にあると考えられた。部分的に白くなる群ではインピーダンスの減少がみられなかったことから、インピーダンスは発赤予後あるいは治癒過程を予測できる可能性が示唆された。
19. 看護師による I 度褥瘡の判断方法と褥瘡発生予測アセスメントとの関係	共	2014年2月	日本褥瘡学会誌 16巻1号	看護師の I 度褥瘡の判断方法と褥瘡発生予測アセスメントとの関係を自己記入式調査を行い、検討した。I 度褥瘡の判断方法は、「見た目と手で触れての両方で判断」、「見ただけで判断」、「手で触れるのみで判断」にわかれ、見ただけで判断している方が、ケア時の皮膚観察の頻度が少なく、スケールを使用せずに褥瘡発生予測アセスメントを行なう傾向がみられた。
20. 急性期看護実習における手術室見学実習の学び—学生の記述内容の分析から—	共	2013年8月22日	日本看護研究学会第39回学術集会	急性期看護実習を履修した看護学生165人にアンケート調査を実施した。学生の学びは【術前・術後の患者の理解】【手術室の環境】から手術室に向かう患者の不安や緊張を共感できていた。【手術室にいる患者の状態】では、術中の侵襲の大きさを知り、術後患者の重症度や観察ポイントについて考えることができていた。【マンパワーと連携】では、手術室看護師の活動・役割の理解を深められていた。
21. 急性期看護実習における手術室見学実習の学び—学生の記述内容の分析から—	共	2013年8月	第39回日本看護研究学会学術集会	急性期看護実習初日に手術室見学を行った学びを実習終了後のアンケート調査記述内容から分析した。術前・術後の患者の理解、手術室の環境、手術室にいる患者の状態、マンパワーと連携のカテゴリーが導かれ、実習目標達成に必要な学びがあったと考えられた。
22. 電気インピーダンス計測からみた消褪しない発赤・1度褥瘡判定の妥当性の検討	共	2013年8月	日本看護研究学会第39回学術集会	ガラス板法判定で消褪しない発赤を対象 (n=8) に、電気インピーダンスを測定した。発赤部とコントロール部の差をもとに、発赤皮膚組織の水分増加状態の有無を分析した。4例は増加、4例は減少であったことから、消褪しない発赤のエカニズムは単純に炎症による水分増加のみではない可能性が示唆された。
23. 看護師による I 度褥瘡の判断方法と褥瘡発生予測アセスメントとの関係	共	2013年3月	日本褥瘡学会第10回近畿地方会	I 度褥瘡判断方法と褥瘡発生予測アセスメントとの関係について、自記式郵送調査を行なった。回収率74.7% (n=1,411) であった。目視のみで判断している方が、ケア時の皮膚観察頻度は少なく、スケールを使用せずに褥瘡発生予測アセスメントを行なう傾向がみられた。
24. 消褪しない発赤・d1 褥瘡部位の電気インピーダンス計測	共	2013年10月12日	日本人間工学会看護人間工学部会第21回	d1褥瘡の判別は早期ケア介入の決定に重要である。d1褥瘡を消褪しない発赤と定義し、その発赤部の電気インピーダンスを計測し、色応答と電気的特性との関連を検討した。その結果、圧迫・ずれ要因によ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
25. 急性期看護実習におけるICU見学実習の学び-学生の記述内容の分析から-	共	2013年10月	日本看護学会成人看護I	発赤や全面が均等に白くならない色応答の場合、発赤部インピーダンスは増加しており、健常部と比べて水分が減少していると考えられ、発赤部皮膚組織損傷の可能性が示唆された。 2010年のカリキュラム改正以後、成人急性期看護実習にICU見学実習を導入した。2010年～2011年に急性期看護実習を履修した看護学生165人にアンケート調査を実施した。記述内容をコード化し、さらにカテゴリー化した。治療的環境の特性、急性期患者の理解、看護専門職意識の高まりの3つのカテゴリーに分類された。
26. 指押し法とガラス板圧診法の発赤・I度褥瘡判別方法としての信頼性・妥当性の検討	共	2012年12月	第32回日本看護科学学会学術集会	褥瘡I度の指押し法とガラス板法は、ガイドラインで推奨されているが、臨床における実効性は明らかでない。消褪する発赤と消褪しない発赤判定の評定者間一致率を調べた。ガラス板法は指押し法に比べて一致率が高く、消褪しない発赤の判別率が高かった。
27. 褥瘡予防管理ガイドライン認知の有無による看護師のI度褥瘡判断の自信の違い	共	2011年8月27日	日本褥瘡学会誌編集委員会、日本褥瘡学会	I度褥瘡判断の自信はガイドラインを認知している方が高く、指押し法のように確かな判断方法の普及により看護師の自信が高まること示唆された。
28. 褥瘡予防管理ガイドライン認知の有無による看護師のI度褥瘡判断の自信の違い	共	2011年8月	第13回日本褥瘡学会学術集会	褥瘡ガイドラインの認知や指押し法・ガラス板法の使用により、I度褥瘡判断の自信が異なるかを明らかにした。特定機能病院と一般病院に勤務する看護師(n=1,890)を対象とし、回収率は74.7%であった。I度褥瘡判断は自信はガイドラインを認知している方が高く、指押し法の普及により看護師の判断が高まること示唆された。
29. 褥瘡予防管理ガイドライン認知の有無による看護師のI度褥かさ判断の自信の違い	共	2011年7月	日本褥瘡学会誌 第13巻3号	特定機能病院と一般病院の病棟に勤務する看護師・准看護師1890名に褥瘡ガイドラインの認知や指押し法、ガラス板圧診法の使用によりI度褥瘡判断の自信が異なるかを調査した。I度褥瘡判断の自信はガイドラインを認知している方が高く、指押し法の判断方法の普及により、看護師の自信が高まること示唆された。
30. 看護職および介護職のI度褥瘡発見に関わる判断の実態	共	2011年10月	日本看護研究学会第24回近畿・北陸地方会	療養病床を有する看護職・介護職スタッフ564人を対象とし、調査研究を行なった。褥瘡I度発見の難しさ、判断できる自信、指押し法の使用、触れる判断方法の実施、家族指導経験の項目において、看護職と介護職間に有意差があった。介護職の90%が見た目で判断しており、見た目と触れての観察をI度褥瘡判断指標として検討する価値がある。看護職においては、家族指導の実施がI度褥瘡発見に役立つことが考えられた。
31. I度褥瘡発見の実態調査を通して見えてきた院内教育の課題	共	2010年3月	第8回日本褥瘡学会近畿地方会学術集会	経験が浅いスタッフにはI度褥瘡を発見する判断方法の教育、実践に活かすOJTが必要であり、経験を積んでいるスタッフには最新の知識をどのように伝えていくかが課題であった。
32. おむつ内排泄高齢者の臀部皮膚バリア機能からみた皮膚保護ケアに関する研究	共	2009年5月	第18回日本創傷・オストミー・失禁ケア研究会	おむつ内排泄が常時である高齢者の臀部は湿潤状態になりやすく、皮膚バリア機能を低下させる。撥水性オイルをおむつ交換時に使用した介入群(n=7)と非使用群(n=9)のTEWLと角層水分量を測定死、比較した。TEWL変化率は測定開始4週間後に介入群の方が結いに小さくなり、撥水性オイルの湿潤防止効果の可能性が示唆された。
33. 冷却刺激がもたらす皮膚組織温度伝導と皮膚表在血流との関連	共	2008年8月	第10回日本褥瘡学会学術集会	仙骨部皮膚冷却刺激による皮膚組織温度伝導を推定し、皮膚表在血流との関連を検討した。温度伝導率と血流量に正の相関が認められ、温度伝導率が血流評価指標となること示唆された。
34. Evaluation of Peristomal Skin Surface with Replica Morphology by SUMP Method in Japanese Colostomy Patients(査読付)	単	2006年7月	第16回WCET学術集会 16th Biennial Congress of The World Council of Enterostomal Therapists	23 female peristomal skin surface replica samples were involved and the number of male ones were 69. Peristomal skin surface are supposed to be not a little damage. The suggestion of this evaluation is that most of peristomal skin surface are kept in trigger status of skin trouble occurrence. Skin care to deduce mechanical stress is indicated to be very important.
35. 在宅発症した拘縮を伴う重症多発褥瘡患者の一例(査定付)	共	2006年3月	日本褥瘡学会第3回近畿地方会学術集会	リウマチによる強度の全身拘縮がある80代女性の多発褥瘡ケアを報告した。全身5カ所全てに骨露出があり、黒色壊死を伴っていた。栄養管理士、家族とともに栄養面の工夫、徹底した創洗浄、適切な体位ポジショニング、高機能エアマットレスにより、7週間後に赤色肉芽が骨周囲を覆うまでに改善した。
36. コロストミー患者の退院後にみられるストーマ周囲皮膚障害および皮野形態像の実態	共	2006年12月	第26回日本看護科学学会学術集会	ストーマ外来通院患者で術後1年以内のコロストミー患者(n=67)のストーマ周囲皮膚障害と皮野形態像の実態を明らかにした。がん化学療法を併用している場合、下痢便はストーマ皮膚障害と関連があり

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
37. 高齢患者の清拭群とシャワー・入浴群との皮膚機能の比較からみた清潔ケア方法の有用性の検証	共	2006年12月	第26回日本看護科学学会学術集会	、凸面内蔵装具を使用することが多くなるためと考えられた。下痢便持続の皮膚障害オッズ比は6.0であり、下痢便コントロールの看護ケアおよび下痢便を漏らさない装具管理が重要である。
38. 生理学的指標からみたシムズ位の身体的安楽性の検証	共	2006年12月	第26回日本看護科学学会学術集会	高齢患者の清拭群とシャワー・入浴群について、入院時と1週間後の皮膚機能 (TEWL、表皮 pH) を比較した (n=34)。入院時と1週間後の差を比較した結果 (t 検定)、TEWLに有意差がみられた (p<.05)。
39. 背あげ・背さげにおける3種類マットレスの仙骨部圧・ずれ力に関する効果 (査読付)	単	2005年8月	第7回日本褥瘡学会学術集会	褥瘡好発部位の仙骨部や大転子部の除圧に有効なシムズ位の身体的安楽性について仰臥位と比較した。健康な女性 (n=20) を対象に、副交感神経活性指標 (RR間隔、HFパワー値)、ストレス指標 (唾液中のアミラーゼ値)、呼吸機能 (SP02) を収集した。仰臥位とシムズ位は生理学的にな身体的安楽性は変わらないことが明らかとなった。
40. 高齢者におけるおむつ内排泄の湿潤と組織耐久性との関連について (査読付)	共	2004年9月4日	日本褥瘡学会誌編集委員会、日本褥瘡学会	背上げ・背下げによって仙骨部圧とずれ力に変化はあるのか、3種類のマットレスによる違いはあるのかを調べた (n=10)。背上げ時の圧に有意差はなく、背下げ時にプレミアグライドが有意に小さかった。ずれ力では、背上げ時がプレミアグライド<パラケア<ピュアレックスの順であり、背下げ時がプレミアグライド<ピュアレックス<パラケアの順であった。圧・ずれ力ともにプレミアグライドが低地で変化も小さかった。
41. 褥瘡対策診療計画書からみた危険因子評価の実態	共	2004年5月	日本褥瘡学会第一回近畿地方学術集会	モイスチャーチェッカーで測定した結果、仙骨部は31.2±5.2%、尾骨部は38.1±7.8%、臀溝部は38.1±7.8%であった。尿回数と角質水分量とは全部位に中等度の正の相関があった。尿による湿潤が皮膚表面に影響があることが考えられ、湿潤することが皮膚損傷のリスクになる可能性が示唆された。
42. 病院におけるステージ3・4の褥瘡患者に対する圧迫の管理と局所ケアに関する実態分析	共	2003年8月30日	日本褥瘡学会誌編集委員会、第4回日本褥瘡学会学術集会	褥瘡患者管理加算新設に伴い、褥瘡ケアの質を見直すために診療計画書における危険因子評価の実態を後ろ向きに調査した。記入率は栄養状態低下が1.0%、皮膚湿潤と浮腫が81.9%であった。栄養状態の記入率は高かったが、アルブミン値低下と一致していたのは37.5%にすぎなかった。栄養状態評価方法の教育が必要であると示唆された。
43. 創傷・オストミー・失禁 (WOC) 看護認定看護師がストーマケアの室に与える影響に関する研究	共	2000年5月13日	日本創傷・オストミー・失禁ケア研究会誌第9回	77病院 (80.2%) から回答を得た。汎用された静止型・上敷きエアマットレスでは体圧分散が不十分である状況も多くあり、有効な体圧分散ができるエアマットレスの選択と管理、体位変換用具が必要であった。創の状態および創治癒過程アセスメントが不十分であったことから、ドレッシング材等の使用や消毒・洗浄が必ずしも適切に行なわれていないと考えられた。今後はwocnを活用して褥瘡ケアチームの活動を推進していく必要がある。
44. 創傷・オストミー・失禁看護認定看護師の看護援助技術と役割-アンケートによる本人から見た業務内容および成果と婦長からの評価-	共	1998年1月	第8回日本創傷・オストミー・失禁ケア研究会	WOCナースの介入によってセルフケアの確立を1週間早めることができ、セルフケア確立のために術前・術後から患者に意図的で計画的なケアを展開していることが分かった。スタッフナースに直接ケアのモデルを示すなどケア水準を均質にしようとして努力しているが、術後日数に応じたアセスメント・装具交換などの実施・記録が確実にこなされているわけではなく、スタッフナースへの教育・指導のさらなる推進の必要性が示唆された。
3. 総説				
1. 近畿地方会と褥瘡治療の10年	共	2015年3月	日本褥瘡学会近畿地方会創立10周年記念誌	調査対象は17名のWOCナースと30名の病棟婦長。調査結果は、WOCナースの看護援助技術の特徴は、①局所ケア技術やケア材料の選択・活用、②患者の精神的問題の解決、③看護スタッフと医師からの相談・指導対応であった。WOCナースがもつ看護援助技術とその成果を示したうえで、WOC看護領域のケアのための時間確保を含めた活動指針を提示していく必要があることが考えられた。
2. 褥瘡予防の看護研究	共	2007年10月15日	医学書院/看護研究	-発表内容からみた褥瘡予防・管理の変化-
3. 褥瘡管理は進歩したか リスクアセスメントと看護介入に焦点をあ	共	2005年9月	中山書店	車椅子座面のコントゥアー型は標準型と比べて着座面臀部の圧力および大腿部への圧力が分散でき、平均的な低い圧力分布であった。そのため安定した90度座位姿勢が可能であり、骨盤位置を安定させるため座位姿勢が保持できると考えられた。しかし、仙骨座りになると、尾骨部に高い圧力が負可されることから、不適切な姿勢であるといえ、姿勢の整えるためバックレストや座幅にも注意を要する。
				【ターミナル期のリスクアセスメントに何をを用いるか】を担当し、現存するアウケールの限界を見定め

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3. 総説				
てて「 4. Urological Nursing WOC看護の 現状とWOCナースの役割	共	1999年6月30 日	メディカ出版	、新しいエビデンス追求の必要性を論じた。文献デ ビューの結果、緩和ケア病棟・ホスピスにおける褥 瘡発生率は10～28%であり、他の療養場所と比べて 少ない。褥瘡発生要因の多様性やリスク程度、 ケア介入について記載されておらず、研究の難しい 分野であり、開発途中のリスクアセスメントの妥当 性・信頼性の検証もされていない現状であった。 21世紀を目前にいて、人々を取り巻く社会的・経済 的環境はかつてない急激な変貌を遂げている。創傷 やオストミーや失禁という人間にとっての尊厳を揺 るがされるような体験をしている患者もその苦痛を 乗り越え、セルフケアを獲得していくことの重要性 が強調されてきた。認定看護師制度が始まって3年が 経過したところで、WOC看護の役割・課題について特 集および教育課程での研修内容を公開したものであ る。
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 平成20年度姫路市製作研究費助成 事業による共同研究	共	2009年3月31 日	兵庫県姫路市	高齢者がいきいきと暮らせるまっすぐりを目指す姫 路における音楽療法の取り組み
2. 在宅における褥瘡治療-up to d ate-	共	2007年9月	第9回日本褥瘡学会ラン チョンセミナー	日本褥瘡学会在宅医療委員会は在宅における褥瘡治 療・ケアの実態や褥瘡有病率を調べ、今後の委員会 活動の方向性を検討した。WAMNET登録のある全国訪 問看護ステーションから1478件の回答があり、日本 褥瘡学会誌9巻1号に報告した内容をさらに分析し、 講演した。
3. 民間急性期病院における褥瘡ケア の実践と指導の効果	単	2007年3月	第1回なにわ創傷ケアフ ォーラム	なにわ創傷ケアフォーラムの第3回で、1年間の褥瘡 ケア実践を通しての褥瘡対策組織活動、経験症例に おける褥瘡アセスメントと看護ケアについて発表し た。ICU入室患者の踵部褥瘡の増加、その予防対策に ついて概説した。
4. 第4回大阪看護教育管理学会 シ ンポジウム		2006年10月2 2日	大阪府看護協会	安全安心の看護提供体制をめざして一キャリア開発 と活用 シンポジストはCN（認定看護師）2名、CNS（専門看 護師）2名であった。 各立場で活動内容を講演した。
5. 腹部の術後離開創にフィブラス トスプレアの使用効果がみられた2 例	単	2006年1月	第2回なにわ創傷ケアフ ォーラム	リウマチ多発筋腺症70歳代男性。S状結腸穿孔にてS 状結腸切除術とストーマ造設術後に再入院した。腹 部創の全離開と真菌検出があった。創のぬめりが減 少した時点でフィブラストスプレアを使用し、創は 縮小した。もう1事例は肝細胞破裂にて救命救急セ ンター搬入、2度のTAE施行後の70歳代男性。パンコ マイシン洗浄後、フィブラストスプレア使用開始26 日目で創収縮の進行が認められた。
6. 褥瘡調査結果	共	2002年2月	関西褥瘡ケア研究会/関 西褥瘡ケアセミナー	近畿96病院の褥瘡に関する調査回答の集計・分析を まとめ、発表した。ステージⅢ・Ⅳ度の重度褥瘡の 創傷被覆材使用は一般病棟が18.5%で、療養型が10. 0%であり、創傷被覆材に関する情報不足が示唆され た。体圧分散寝具は汎用型一体成形セル型が多く、 普及が進みつつあった。WOCナースのコンサルテー ション機能が十分に浸透していない現状が明らかにな った。
7. 専門看護師・認定看護師の看護ケ ア技術とその結果および退院促進 事例の検討	共	1999年3月	平成10年度厚生省医療 技術評価研究事業研究 報告	認定看護師、専門看護師、CNSおよびNPに関する技術 評価研究である。創傷・オストミー・失禁（WOC）看 護認定看護師の看護サービスが入院期間短縮に影響 することが明らかとなった。
8. 産婦人科外来における妊婦保健指 導基準の作成	共	1978年3月	1978年度看護研究集録 （聖路加国際病院看護 教育委員会）	産婦人科外来で行なっている妊婦保健指導には、POS 看護記録を導入している。看護婦によって指導内容 に違いがあるため、指導基準を作成した。貧血に対 する指導が最も多く（40.4%）、次に妊婦肥満や妊娠 中毒症であった。食品構成表を利用して食事・生活 指導を行なった。
6. 研究費の取得状況				
1. 褥瘡予防ケア向上を目指した交感 神経活動と圧迫時血流変化の関係 の検討	共	2018年4月	平成30年度基盤研究（C ）（一般）	
2. EOLシミュレーション教育の教 育効果とシナリオの発展に関する 研究	共	2017年4月	科学研究費補助金（基 盤研究C）	
3. 入院・在宅高齢者の褥瘡早期検出 機器開発の基礎研究	共	2017年4月	科学研究費補助金（基 盤研究C）	
4. 褥瘡予防のための足部・下腿部の 産熱保持寝具・被覆用具による血	共	2016年4月	科学研究費補助金（基 盤研究C）	

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
6. 研究費の取得状況				
5. 褥瘡発生アセスメントにおける皮膚血流評価ツールの実用化検証	共	2014年4月	科学研究費補助金（基盤研究C）	

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2018年3月17日	日本看護研究学会第31回近畿・北陸地方会学術集会 実行委員
2. 2017年4月～現在まで	武庫川女子大学看護学部 まちの保健室プロジェクト
3. 2017年11月11日	日本人間工学会看護人間工学部会研究発表会 実行委員
4. 2017年	日本看護学会慢性期看護学術集会抄録選考委員
5. 2016年	日本看護科学学会実行委員
6. 2014年9月5日	日本人間工学会第22回看護人間工学部会 一般演題座長
7. 2013年7月19日2013年7月20日	第15回日本褥瘡学会学術集会 「教育Ⅱ」座長
8. 2013年12月6日2013年12月7日	第33回日本看護科学学会実行委員、交流集会会場係
9. 2012年3月3日	日本看護研究学会 第25回近畿・北陸地方会学術集会 看護セミナー講師 褥瘡予防のポジショニング
10. 2011年から2015年	日本褥瘡学会誌編集委員会委員
11. 2010年から2016年	日本褥瘡学会学術委員会委員 ガイドライン改訂委員
12. 2009年9月4日	第11回日本褥瘡学会学術集会「在宅医療Ⅲ」座長
13. 2009年8月～現在	日本褥瘡学会評議員
14. 2009年8月～現在	日本褥瘡学会近畿地方会世話人
15. 2009年7月10日2009年7月12日	第31回ストーリーメイクア講習会実行委員会 実行委員、インストラクター
16. 2008年	第10回日本褥瘡学会学術集会 「基礎Ⅰ」座長
17. 2007年9月	第9回日本褥瘡学会ランチョンセミナー -up to date-
18. 2007年12月3日	第26回日本看護科学学会実行委員 市民フォーラム 会場担当
19. 2007年12月2日	第26回日本看護科学学会交流集会 企画 「博士課程の学生に求められる研究者としての能力」
20. 2006年12月2日2006年12月3日	第26回日本看護科学学会学術集会 実行委員
21. 2004年8月6日2004年8月8日	第26回S T O M A ケア講習会 実行委員
22. 2003年5月11日	第12回日本創傷・オストミー・失禁ケア研究会実行委員、プログラム委員
23. 2002年8月9日2002年8月11日	第24回S T O M A ケア講習会 実行委員
24. 2002年5月11日	日本創傷・オストミー・失禁ケア研究会 一般演題 座長
25. 2002年5月11日	第11回日本創傷・オストミー・失禁ケア研究会 座長「これからのストーリーメイクア」